

ナサニエル・ホーソーン  
『ブライズデイル・ロマンス』

————— 「銀白のヴェール」に関する一考察 —————

高 島 まり子

序

『ブライズデイル・ロマンス』(*The Blithedale Romance*)に一貫して神秘的な影をおとすのは「ヴェールの婦人」(“the Veiled Lady”,以下「婦人」と略称する)の存在である。それはこの作品の色調を決定しているとも言えよう。「婦人」がその中で捕われの身となっている「銀白のヴェール」(“the silvery veil”,以下「ヴェール」と略称する)は何を意味するのか。それが作中で果たす役割は如何なるものか。それはまた、作者ホーソーンの根本的テーマと考えられる人間の罪とその救済になんらかの関係を持っているのか。あるいは、神秘的色彩を帯びた小道具の一つに過ぎないのか。

Hyatt H. Waggonerは、この作品に“veil image”と“fire image”という二つの主要なimageryの流れを見出して詳細に論じている。<sup>(1)</sup>確かに、「ヴェール」はこの作品の意味を考える上で、重要な一つの鍵になると思われる。この小論においては、テーマを「婦人」が被る「ヴェール」に絞って、以下四つの視点からその意味あるいは作中での役割を複眼的に考察してみたい。即ち、第一章では作品自体に現われる「ヴェール」の具体的な定義を挙げ、その定義がいかに作用しているかをWaggonerの見解に沿って吟味し、第二章で「ヴェール」に対する主要な登場人物の反応を分析し、第三章では「ヴェール」を媒介とする筋の展開に視点を定め、第四章ではその中身(即ちプリシラ)に関連して「ヴェール」の果たす役割を論じてみたい。

—

「婦人」が作中に登場するのは間接的に二度、直接的には一度、合計わずか三度に過ぎない。間接的にはI章で「婦人」を中心とする催しから帰宅する途中のカヴァデールの説明の中に、XIII章でゼノビア自作自演の“The Silvery Veil”という挿話の中に、また直接的には、XXIII章の公開実験の場に各々登場する。

I章の「ヴェール」の説明によって読者はその外観と機能の両面に知らされる。「日光を浴びた雲のような幾分柔かい銀色を帯びた白い」「ヴェール」は、それを着ている「婦人」を現実の「物質世界から、また時間と空間の制限からも隔絶し、肉体を離れた靈魂の持つ特権を彼女に与えるらしい。」<sup>(2)</sup>これを被る「婦人」は「催眠術界の奇才」(“a phenomenon in the mesmeric line” p.441)と紹介される。

XIII章の挿話の前半では、非常に靈妙で実体が無いように見えながら「ヴェール」が真夜中の暗闇のように中の「婦人」の姿を完全に隠していることに加えて、彼女自身が「ヴェール」は死よりもつらい孤独な隷属状態に自分を閉じ込める牢獄であると訴える。同じ挿話の後半で、催眠術師のウエスタヴェルトを暗示する魔法使いが「ヴェール」を「呪文」であり、自分が「婦人」のために作り出した「魔法」

と呼び、その中で彼女は自分の「囚人」であったと述べる。

次にXXIII章では、「婦人」の公開実験の場でカヴァデールが彼女を“ a blindfold prisoner within the sphere with which this dark earthly magician had surrounded her” (p. 557) と描く。ウエスタヴェルトは「ヴェール」を“ the fluid medium of spirits” (p. 558) を浸み込ませた一種の魔術と呼び、その中で「婦人」は時間や空間の制限を受けずに霊の世界と交信することができる、と同時に彼女はすべての行為を彼の命令に従って行なうのだと断言する。

以上を箇条書きに要約すると、次のようになる。「ヴェール」は、

- ① 神秘的な銀色の物質
- ② 中にある「婦人」の正体を隠すもの
- ③ 彼女を霊的な存在——催眠術の優れた被術者であり、「予言者」とか「千里眼」とか呼ばれ得る超能力者——に変えるもの。
- ④ 彼女を孤独な囚人として呪縛し、絶対的に支配するための道具

さて、この四つの定義は、作中でいかに作用しているのであろうか。まず我々が「ヴェール」から受ける第一印象は、「婦人」の神秘性である。それは、定義①②③からは直接的に、そして④からは、その原因と、またその根底にある彼女と催眠術師ウエスタヴェルトの関係についての疑問をもたらすが故に間接的に、かもしだされるものであろう。しかし、この神秘性は、「婦人」の周辺に止まらない。

Waggoner が指摘する如く「ヴェール」はブライズデール共同体の未来に関する「婦人」の謎めいた予言と結びついてmetaphor として作用し始め、次にムーディ老人とゼノビアの正体にまつわる謎を象徴するmetaphor として拡大される。そして作品全体を貫く“veil image”の母胎となり、筋の展開に伴って様々のもの——ゼノビアが髪に飾る花、窓のカーテン、ウエスタヴェルトの不自然な笑いと義歯、仮装パーティー、カヴァデールの隠れ場所や性癖、ゼノビアの死体を隠す暗い水面等——をmetaphor として包含し、「婦人」の正体、登場人物達の正体、彼らの相互関係、ブライズデール共同体の未来といった謎の真相を隠す仮面を象徴して作品の神秘性を強めるのである。<sup>(3)</sup> このような「ヴェール」の役割は主として「婦人」の正体を隠すという定義②から発展したものであると言えよう。

しかし、「ヴェール」は単に事実を隠すものを象徴し、謎の神秘性を強める役割を果たすに止まらない。Waggonerは、筋の展開に伴って上に列挙した謎が解明されるにつれて逆に“veil image”が強まっていくという矛盾に疑問を抱いた結果、“veil image”の象徴するものが最終的には未来に潜む“frustration”や“futility”を隠すもの、即ち「知りたくない現実」を隠すものになっているという解答を見出す。従って、醜悪な“reality”を隠し、美化してくれる“veil”なくして人間はいかなる美徳も為し得ず、“veil”の存在があって初めて“fire image”に象徴される友愛や団結の幻想が一時的にせよ可能となるのであるという結論に達する。<sup>(4)</sup> 「ヴェール」の定義②は、“veil image”の象徴するものを考察した結果、かくの如く変形し、発展しているのである。

それに加えてWaggonerは「ヴェール」の定義④と部分的に一致する“veil image”の機能、即ち「人を孤立させる働き」に注目し、ホーソーンの他の作品の主人公達——「牧師の黒ヴェール」のフーパー牧師、『緋文字』のディムズデール、「あざ」のエルマ——を挙げて説明し、この作品においても

一方で“veil”は、「望ましい真実」（“the desired truth”）を我々が知覚するのを妨げ、我々を孤立させる障壁として働いていると指摘する。<sup>(5)</sup>

これらの共存しながら対立する“veil image”の役割をいかに位置づけるか、即ち一時的にでも友愛や連帯の実現の幻想を抱かせてくれる“saving ignorance”として“veil”を受入れるべきか、あるいは逆にお互いを欺いて孤立させるものとして排除すべきか否かの選択を、Waggonerは問題提起する。そして、筋の展開に伴う“veil image”と“fire image”の力関係の推移を考察した後、共同体の実験の成功のためには登場人物が各々の欺瞞の“veil”を取り去って真実の姿となり、孤立から脱出して悔い改めねばならなかったというのがこの作品の意図であると結論する。<sup>(6)</sup>この見解に従えば、「ヴェール」の定義はまず第一に①～④からこの作品を特徴づける神秘性を生み出し、究極的には主として②と④の働きの発展によって、ホーソーンがこの作品に託したモラルを指唆する重要な役割を果たしていると言えよう。

## 二

本章では、登場人物の「ヴェール」に対する反応に視点を置いて、独自のアプローチを試みたい。まず、間接的ながら「婦人」がその明確な姿を現わすゼノビアの挿話を考察しよう。この話の前半にはセオドルという架空の青年と「婦人」が、後半には「婦人」、ウエスタヴェルト、ゼノビア自身が登場する。重要な点は、「ヴェール」に対する反応によって登場人物の精神的特質が明示されることであろう。まず前半を要約し、セオドルについて考えてみたい。

「良識」（“common-sense” p. 504）に促され、「婦人」の正体を見きわめるべく忍び込んだセオドルに、彼女は「ヴェール」の上からキスをしてくれるように嘆願する。それによって「ヴェール」は消え、彼女は死よりも悲惨な運命である呪縛から救われ、二人は永遠の至福に至るというのである。しかし「懐疑主義」（“scepticism” p. 506）に傾いた彼は、彼女の真意を疑い、「ヴェール」の下の顔について様々の空想をめぐらせた末その申し出を拒絶し、まず「ヴェール」を持ち上げて彼女の顔を見た後キスするか否かを決めよう、と虫の良い返事をし、結局彼女を永遠に失ってしまうのである。

さて、ゼノビアが徒らにセオドルという人物像を設定したとは考えられない。Terence Martin が指摘する如く<sup>(7)</sup>、我々は彼が誰よりもカヴァデールに似ていることを認めざるを得まい。次に二人の共通点を探り、それに基づいてカヴァデールの人格を考察しよう。

セオドルの精神的特質をまとめると、第一に彼は「良識」家であり、自分の「現実を健全に認識する能力」（“his sturdy perception of realities” p. 504）に誇りを持っている。第二に、「言い表わせぬほどの悲しみの影」（“a shade of inexpressive sadness” p. 506）に閉ざされた「婦人」の言葉に一片の同情すら感じることなく、その真意を疑い、勝手な申し出をする彼の行為の動機は、彼女の言葉通り、「崇高な信念」や「純粋で寛大な意図」ではなく「冷笑的な懐疑」と「浅薄な好奇心」（“Dost thou come hither, not in holy faith, nor with a pure and generous purpose, but in scornful scepticism and idle curiosity?” p. 505）であると言えよう。語り手ゼノビアも、セオドルの生来の傾向は「懐疑」に向いていると述べている。（p. 506）第三に、「婦人」の正体に関する

彼の様々の愚かな——彼自身が軽蔑した友人達の噂話と変わる所の無い——空想を考慮すれば、第一の点とは逆に、彼には現実を歪曲するような空想にふける傾向のあることが解る。第四に、まず彼女の顔を見た後キスするか否かを決めようと答える彼は、自分の不利になる危険性があれば決して踏み込まない「保身」の人と言えよう。

以上の点を箇条書きにまとめると、彼の精神的特質は以下の通りである。

- ① 「良識」
- ② 「崇高な信念」と「純粋で寛大な意図」の欠如
- ③ 「冷笑的な懷疑」
- ④ 「浅薄な好奇心」
- ⑤ 現実を歪曲するような「空想」
- ⑥ エゴイスティックな「保身」

それではカヴァーデールはこれらと共通する特質を備えているであろうか。まず①の「良識」については、彼自身がこの言葉を使っている箇所が三つある。VI章で病気になった彼がそれ以前の安楽な独身生活をなつかしんで不平をこぼす場面、XV章で彼が共同体の実験を「良識」に基いた堅実なものだと弁護する場面、そしてXVIII章で夢に出てきたプリシラの悲しげな表情への言及、においてである。

これらの例はカヴァーデールに「良識」が備わっており、彼がそれを重要視しているという設定を暗示する。次の問題は彼の「良識」の性質である。上記の第一の例において彼は、「良識」に従えば苦勞の多い共同体の生活より前日までの都会生活の方が良かった、と後悔する。従って、彼の「良識」が社会改革という理想的価値の実現よりも現実の個人的安逸を求めるような世俗的利己的な価値基準であることが明らかとなる。同様に第三の例で、夢の持つ深い意味に対する洞察力の欠如が、彼の感受性の世俗的限界を示す。第二の例だけが、現実に立脚した堅実な価値基準としての彼の「良識」の肯定的な側面を示している。このように、彼の「良識」が肯定面と否定面とを併せ持つことに注意せねばならない。

第二の例に暗示される肯定面は、それ以上に、夢想的な改革者達の対極を成す「良識」の権化の如き農夫フォスターに共鳴する彼の姿に暗示されている。例えば、IV章でプリシラの突然の登場に動揺する他の人々をしり目に、実際的な指示を少々与えただけで彼女の受入れという難題をあっさり解決してみせるフォスターを“… his expressions did him honor.” (p.456)と賞賛している。だが、XXIV章の仮装無踏会の場面においてほど彼の立場を高く評価した箇所は無い。他愛なく戯れる改革者の群を普段着のまま一人離れて鋭くみつめる彼の視線——堅固な「良識」の象徴と思われる——が“… did more to disenchant the scene, . . . than twenty witches and necromancers could have done in the way of vnderng it weird and fantastic.” (p. 563)とカヴァーデールは述べる。これらの例は、彼が「良識」に認める価値と共に、それが実際に含んでいる倫理的価値をも表現しているのである。

一方、第一、第三の例に示される否定面は、VIII章でゼノビアがカヴァーデールの詩人(芸術家)としての不徹底と無能ぶりを批判するために諷刺をこめて描いたフォスター像に、明確に表現される。そこに描かれる彼の下品で野蛮な生活様式や低俗な感受性は、カヴァーデールもまた軽蔑しているものであると共に、確かに彼自身の「良識」の世俗的閉鎖的な限界を極端に誇張した姿でもある。

カヴァーデールの「良識」のこのような二面性の内、肯定面がセオドールの「良識」と一致するというときには、議論の余地はない。セオドールは、「婦人」に関する友人達の非現実的な噂話にその「良識」の故に耐えられず、彼女の正体をみきわめようと決意するのであるから。即ち、彼の「良識」は空虚な欺瞞や空想に対立し、現実立脚して生きようとする堅実な精神的特質であると言えよう。しかし、それだけに止まらず、実際には彼もカヴァーデールと同様に否定面をも持ち合わせていると推測できる。なぜなら、それこそが、②の「崇高な信念」と「純粋で寛大な意図」の欠如と表裏一体を為し、③の「冷笑的な懐疑」の根底にあるものだからである。従って、カヴァーデールにはセオドールの「良識」と明確に一致するその肯定面と、恐らく一致するであろうと思われるその否定面とが共存すると言えるであろう。

②の「崇高な信念」並びに「純粋で寛大な意図」の欠如という点は、③の「冷笑的な懐疑」と微妙に呼応しつつ、ambivalent な形で表われる。例えば、Ⅱ、Ⅲ章では、理想的共同体の実験に参加するヒロイズムを述懐し、その目的を“generous”と呼び、“pride”を捨て“familiar love”によって生きる意志を表明し、その実現のための“faith”や“force”を持っていた当時の自分に現在でも満足していることが窺える。(p. 444) 同時に、③の「懐疑」を通してその実験を“day - dream” (p. 444) と呼び、抱く価値のある幻想であれば必ず失敗に帰するという諦念を吐露している。共同体の実験に関するこの対立する感慨は、根本的には彼の回想という形式で作品が書かれていることに帰因する。即ち、彼は作品の冒頭において既に実験の失敗とそこに至る全ての事件を体験した後であるが故に、そこに語られる過去の心情は、現在のそれを反映せざるを得ないのである。

しかし、過去の彼に「信念」、「純粋さ」、「寛容」が完全に備わっていたか否かは疑しい。と言うのは、Ⅷ章で共同体の一員として理想的な精神状態に再生したような感慨を抱くにも拘らず、次章で彼はプリシラに共同体の実験や友愛に関する悲観的感想を語るし、ⅩⅤ章で共同体の未来を信じているような発言の後、ホリングワースとの仲が決裂するや否や次章でさっさとボストンに退却してしまうのであるから。従って「信念」は完全に欠けているとは言えないまでもセオドールへの非難が部分的に当たるがゆえに、カヴァーデールに於て②は「懐疑に損われた信念」とでも呼ぶのが妥当であろう。これを②' とする。

②' から必然的に出てくる③の「懐疑」については多くの例が見出されるが、一部分引用する。ⅩⅡ章では、彼が木の上にある孤立した隠れ家から共同体を見おろして、この改革の実験を“ridiculous” (p. 498) と感じ、大声で笑わずにはいられない場面がある。その後、この“the sceptical and sneering view” (p. 499) が会ったばかりのウエスタヴェルトの影響であることに気づき、自分自身の性質に彼に呼応する「冷笑的、懐疑的」部分があることを認めるのである。これはⅩⅩⅣ章で悪魔の仮装をした人物の“He is always ready to dance to the Devil's tune!” (p. 563) という言葉によって裏書きされる。またⅩⅩ章ではゼノピアに“a monstrous scepticism in regard to any conscience or any wisdom, except one's own” (p. 539) を非難される場面がある。

④の「浅薄な好奇心」については、Ⅸ章で彼自身が他人の内面に対する詮策を自己批判し、ⅩⅩⅢ章ではそんな行為の根本にある自分の「冷たさ」 (p. 530) に言及している場面に明らかである。

その一方、“to live in other lives, and to endeavor ... to learn the secret which was hidden even from themselves” (p. 533) という自分の性向に一種の誇りを持ち、「好奇心」を

正当化している。しかし、自分では“generous sympathies” (p. 533)によって友人達の秘密を探っているのだと意識しているものの、XIV章のプリシラやXIX、XX章でのゼノビア、またXXIII章のホリングブワースに対する彼の徒らに相手の心を刺激する意地の悪い質問の数々は、彼の「好奇心」が決して崇高な性質のものでないことを明示している。それらの質問は、我々に『緋文字』のチリングワースを想起させるに足る他者の心への悪質な侵入とその攪乱という傾向を持っているのである。

⑤の「現実を歪曲するような空想の傾向」については、周囲の人々や、共同体の性質に関する現実から遊離した空想にその例が見い出される。Frederick C. Crews は、ゼノビアに対するカヴァーデルの態度と彼女にまつわる空想を重視し、彼女とホリングブワースとプリシラの三角関係に執着して各々を母、父、妹のように見ている点やあらゆる場面での逃避的傾向から、カヴァーデルを“a casualty of Oedipal strife”<sup>(8)</sup>と断定する。そしてそのロマンティックな空想は“mature sexual challenge”<sup>(9)</sup>からの逃避と幼児退行を意味し、ゼノビアは“sexual challenge”の試金石であると同時に逃避主義への非難を象徴していると言う。<sup>(10)</sup>この見解には非常に説得力があると思われるが、彼の他の精神的特質を考慮すると、感覚や思考、行為のすべてをエディプス・コンプレックスで説明しようとする Crews の見解は行き過ぎの感を免れない。

さて⑥の「保身」については、冒頭のムーディ老人の頼みに警戒心を示す場面から既にカヴァーデルの特質の一端として提示されるが、最終章では自嘲をこめてそれを誇張した彼自身の言葉がある。

…I by no means wish to die. Yet, were there any cause, in this whole chaos of human struggle, worth a sane man's dying for, and which my death would benefit, then—provided, however, the effort did not involve an unreasonable amount of trouble—methinks I might be bold to offer up my life. If Kossuth, for example, would pitch the battlefield of Hungarian rights within an easy ride of my abode, and choose a mild, sunny morning, after breakfast, for the conflict, Miles Coverdale would gladly be his man, for one brave rush upon the levelled bayonets. Further than that, I should be loath to pledge myself. (p. 584)

以上でセオールドとカヴァーデルの共通点が明らかになり、前者は後者を暗示すると考えて支障はあるまい。また、以上の共通点の確認によってカヴァーデルの精神的特質を分析することができたわけであるがこれらは相互にいかに関連し合っている一人の人物の中に統合されているのであろうか。作品を貫く彼の感情の ambivalence に注目した Terence Martin の指摘する如く、カヴァーデルを「雪人形」における対立する二つの視点——「良識」の限界を象徴するリンジー氏と、“faith”によって“a vision of the wonderful”の深淵な意味を洞察できるリンジー夫人と——の「結婚」と規定することも可能であろう。即ち、彼は“a faith seamed with doubt”によって共同体の実験とプリ

シラの両方を失ってしまった、というのである。(11)

しかし、彼を支配するのはこの二つの視点ばかりではない。既に考察した如く、この作品において「良識」は、必ずしも非難の対象であるだけではない。フォスターという形で共同体の内包する欺瞞的要素を鋭く批判する役割をも果たしているし、カヴァーデール自身その立場に共鳴している。一方、ゼノビアが嘲笑的に描くフォスター像に凝縮される「良識」の限界は、カヴァーデールに於て低俗なリンジー氏の視点に止まらず、ウエスタヴェルトと共通する冷笑的「懐疑」とそれに基づいた利己的な「保身」にまで発展していると言えよう。従って、彼の「良識」は二面性を持ち、現実に立脚した生き方として肯定的に働く一方、「懐疑」や「保身」を含む低俗性として否定的に働くのである。

Martin がカヴァーデールに見出したもう一つの“faith”という視点は、ambivalent な形ながら確かに存在するが、それだけが「良識」と対立する視点であろうか。今、現実に立脚した「良識」を「現実への信頼」と規定した場合、それに対立する概念は「非現実への信頼」と規定することができよう。

リンジー夫人の具現する“faith”は、世俗的な洞察力では見えない真実や天上の要素に対する信念であるが故に、これに含まれる。同時に別の観点から、Crewsの注目したカヴァーデールの逃避的「空想」も、彼の「非現実への信頼」に含まれるべきであろう。彼の「空想」はリンジー夫人の“faith”と違い、“truths so profound that other people laughed at them as nonsense and absurdity” (12)を明らかにすることなどなく、逆に現実に虚飾を施して“truths”を隠蔽するものに過ぎないが、現実から遊離している点で「良識」と対立しているのである。彼の「現実への信頼」（「良識」）が二面性を持つと同様に、「非現実への信頼」も理想的、芸術的、天上的なものに対する「信念」（“faith”）という肯定面と、逃避的「空想」という否定面とを併せ持つのである。

既に①から⑥に分類されたカヴァーデールの精神的特質は、「現実への信頼」とそれに対立する「非現実への信頼」とに分裂し、しかも前者が①の肯定的「良識」と③「懐疑」、⑥「保身」を含む否定的「良識」とに二分され、後者は②'の原型たる純粋な「信念」と⑤の逃避的「空想」とに二分される。これらの四つに分裂した要素は、むしろ静的に共存しているのではなく、否定的「良識」と「信念」が、また肯定的「良識」と「空想」とが各々相互に制限あるいは圧殺しあう方向に作用する対立関係にある。これらに④の「好奇心」を加えた統一体として、我々は彼の全体像を捉えることができるのである。

この像が現実においていかに機能するかを見るために、セオドル（カヴァーデール）の反応形式を再考したい。彼は、「婦人」の嘆願を「良識」の限界たる世俗の見地から「懐疑」をもって判断することしかできず、逃避的な「空想」の末、「保身」のためにキスを拒絶しながら、「好奇心」は捨てきれずに「ヴェール」の中を覗く。彼には、エゴイズムを超越し、対象に内在する真実に対して「信念」を持つことは不可能なのである。「ヴェール」に対するこの反応形式に従えば、先述のカヴァーデールの人物像に於て、肯定的「良識」と「信念」は結局は無力化してしまい、「現実への信頼」という面では、「良識」の低俗な限界にとらわれて「保身」に汲々とする「懐疑」家であり、その一方「非現実への信頼」という面では、自己存在を賭けるべく迫られると危険を回避するため逃避的な「空想」家に変身する彼の姿が浮かび上がるのである。

実際に作中において、彼は冒頭からムーディ老人に“a great favor” (R 442) という形で暗示され

たプリシラへの助力を「保身」のために渋り、共同体の中では、彼女の無私の愛と周囲の人々の善に対する「信念」を彼自身の「懐疑」を通して見た虚無的な人生観で曇らせようと試み、空虚な「空想」に溺れるのみで彼女に直接的な愛情表現もせず、ウエスタヴェルトの手中に再び捕えられた彼女を救うために「保身」の枠を一步も踏み出さず、何ら献身的な努力をしないにも拘らず、「好奇心」から彼女の運命を追うことはやめない。このような彼の態度は、他の登場人物に対しても共同体の実験に対しても該当する。即ち、セオールの「ヴェール」に対する反応は、カヴァデールの精神的特質の働きを凝縮して明示しているのである。「ヴェール」はまさに彼の精神的特質を試みる「試金石」の役割を果たしていると言えよう。

では、ゼノビアの場合はどうであろうか。同じ挿話の後半で、彼女は「婦人」を一旦は受け入れながら、彼女が自分の幸福への道に横たわる障害であることを魔術師ウエスタヴェルトに知らされるや否や、彼の依頼に応じて「婦人」を渡すべく「ヴェール」を彼女——この場では皮肉にもプリシラ本人——に投げかける。実際に作中において、ゼノビアは、妹プリシラの捧げる無垢の愛と崇拜を一旦は受け入れながら、彼女が自分の目標への障害物——ホリングズワースとの恋愛の成就を阻止すると共に遺産相続権を脅かす者——であると知ると、再びウエスタヴェルトに彼女を渡してしまうのである。彼女もカヴァデール同様、プリシラの無垢の愛に応えるだけの崇高な「信念」を欠き、恋と財産への執着という世俗的利己的動機からプリシラを裏切ったのである。社会改革と友愛を原理とする理想的共同体の花形たるゼノビアの正体が醜いエゴイストであることを、彼女の「ヴェール」への反応が暴露したと言えよう。

さて、ウエスタヴェルトは、「ヴェール」を被せることによって「婦人」を呪縛し、その精神を意のままにする「魔術師」として挿話に登場する。作中でも同様に、彼はプリシラを被術者として支配する催眠術師として描かれるが、同時にXI, XVIII, XXII 章では「悪魔」として暗示されている。その精神的特質は、動物的な感覚以上の感受性——人間的情熱, “ holy tenderness ”, “ delicacy ”, “ the finest grace ” (p.500)——の欠如した“sceptical and sneering view” (p.499)と“a cold and dead materialism” (p.557)である、とカヴァデールは述べる。それを立証する如く、彼は、ホリングズワースが自分の唯一の目的に必要な資金を得るという下心があってゼノビアに接近しているという懐疑的な見方を暗示し、プリシラの神秘的な繊細さには粗食や運動不足が原因の消化不良の結果を、また、ゼノビアの豊かな情熱と知力には不快なほどの生命力の過剰をしか認めようとはしない。このような特質が彼を導いた究極の地点が、彼の公開実験に見られる人間精神の機械的物理的な捉え方と、その結果であるプリシラという一精神の支配であると考えられる。即ち、この作品において、あらゆる理想的、天上的なものに対する「信念」を全く欠き、人間精神を懐疑的かつ機械的に捉え、それを支配しようとするウエスタヴェルトを、作者ホーソーンは「悪魔」として描いたのである。プリシラに「ヴェール」を被せるという彼の一貫した行為は、ホーソーン的な「悪魔」としての彼の役割を象徴する。

さて、ホリングズワースはこの挿話には登場しないが、XIII 章の公開実験の場面で、「ヴェール」に対する直接的な反応を明示している。彼は、舞台上上がり、「ヴェール」を被った「婦人」(プリシラ)に呼びかけ、「ヴェール」を脱がせると同時に彼女をウエスタヴェルトの手から救出する。彼だけが、彼女の「ヴェール」を取り除いたのである。しかし、この単純明快な彼の反応は、それに至るまでに複

雑な背景を持っている。それを探って初めて、彼の「ヴェール」に対する反応は完全に理解され得るであろう。そのために、まず、プリシラとゼノビアに対する彼の態度の変遷を時の流れに従って追ってみよう。

プリシラを共同体に案内したIV章で、彼は彼女の力強く優しい保護者として登場する。彼女に対する彼の愛情は特にIX章で描かれるが、それと矛盾するような彼とゼノビアの恋愛関係の噂が同時に示される。XIV章でゼノビアの女権拡張論に正面から対立する彼の女性観は、あたかもプリシラをモデルにしたような女性をその理想像として描き出す。従って、彼女に対する彼の愛情の根拠はより明確になるのであるが、同時にゼノビアの彼に対する熱烈な愛情表現をカヴァーデルは目撃する。しかも、彼女とホリングズワースの結びつきが決定的なものとなったことは、次章で彼がその目的達成に必要な資金を獲得する見通しを語ることによって明らかである。XVIII章では、ついに彼がプリシラをゼノビアの、ひいてはウエスタヴェルトの手に渡すのを黙認したらしいことがプリシラの言葉に示される。ところが、その数週間後には彼女を救出し（XXIII章）、また翌々日にゼノビアを拒絶してプリシラに対する恋愛感情を披瀝するホリングズワースの姿が描かれるのである。（XXV章）

以上から明白なことは、ゼノビアに対する彼の気持ちは不明瞭だが、プリシラには最初から非常に強い愛情を抱いていたということと、それにも拘らず彼の表面的な態度が二転した——彼女をゼノビアに渡した時と、それに続く彼女の救出——ということである。まず、彼がプリシラに強くひかれながらもゼノビアの手を通して彼女を再びウエスタベルトの支配下に追いやった理由は何であろうか。彼の資金獲得の見通しを考慮すると、我々は、XI章のウエスタヴェルトやXV章のカヴァーデルの見解に従わざるを得まい。従って、ホリングズワースは自分の目的達成のためにゼノビアの財産を利用しようとし、そのひきかえに彼女の愛を受入れ、彼女に言われるままにプリシラを見捨てた、という推測が成り立つであろう。

それでは、彼が再び彼女を救出した理由は何であろうか。XXII章で語られる如く、ゼノビアのプリシラへの裏切りと時を同じくしてムーディ老人が前者を招き、遺産相続権の放棄を条件に後者の保護を頼んだ事実と、XXV章におけるゼノビアの言葉（“...It is only three days since I knew the strange fact that threatens to make me poor; and your own acquaintance with it,...is of at least as old a date...”）<sup>(13)</sup> から彼女が富を失うであろうことをホリングズワースはプリシラ救出の日に知ったらしいことと考えあわせると、Hugo Mcpherson による「良心の苛責」<sup>(14)</sup> という説明だけでは不十分であろう。ゼノビアの裏切りを知って怒ったムーディ老人が、相続権の放棄を撤回し、彼女から富を剥奪することを決意（あるいは公表も）し、ホリングズワースにすべてを語る。富が老人を経てプリシラに属するであろうことを知った彼は、その日の内に富を失ったゼノビアを捨て、プリシラを救出した、という推測が成り立つのではなかろうか。

このように、ホリングズワースの「ヴェール」に対する反応は決して単純ではなく、一旦は取り除いておきながら、自分の目的達成のために途中でそれを被せようとする勢力に加担し、最後に再び自分の目的のためにそれを取り除いたのである。この一連の反応は、表面的にはプリシラ救出に終わったとはいえ、「博愛主義者」という仮面の下の彼の素顔が醜悪な「エゴイスト」であったことを示すのである。

このような彼のエゴイズムをカヴァーデルは当初から敏感に察知し、既にV章でそれに言及し、VII, IX, XII章で更に詳しく述べているし、ゼノビアもXXV章の三人の対決の場でそれを痛烈に批判している。

以上の考察から、プリシラをめぐる四人の登場人物は「ヴェール」に対する反応によって自らの欺瞞的な仮面の下の正体を暴露したことが明白となる。要約すれば、カヴァーデルは「懐疑」、「空想」、「保身」、「好奇心」、ゼノビアは恋愛と富への執着というエゴイズム、ホリングズワースは目的達成のためのエゴイズム、そしてウエスタヴェルトは人間精神の支配という「悪魔」性を各々示すのである。「ヴェール」はまさに彼らの精神的特質を問う「試金石」であると言えよう。

### 三

本章では、「ヴェール」を媒介とする筋の展開という第三の視点から、「ヴェール」が具体的に如何なる取り扱いを受け、それに応じて筋がいかに関係しているかを考察しよう。

作品は、「婦人」が「ヴェール」を被り、ウエスタヴェルトの支配下にある時点から始まり、IV章でプリシラが共同体に逃亡した時点で「ヴェール」は取り除かれ、彼女は保護される。その状態がXVII章まで続き、次章でゼノビアとウエスタヴェルトがプリシラに「ヴェール」を被せ、彼女は再び捕われる。そして、XXIII章でホリングズワースが「ヴェール」を取り除いて彼女を解放する。このような「ヴェール」の処置に応じて、「ヴェール」を被せようとする力と取り除こうとする力が作中で交互に優位を占め、「ヴェール」をめぐる筋はこの二方向に交互に引っぱられることによって四段階に展開されることが明らかになる。即ち、I～III章（第一部）では「ヴェール」を被せようとする力が、IV～XVII章（第二部）では逆に取り除こうとする力が各々優位を占め、XVIII～XXII章（第三部）とXXIII～最終章（第四部）とで再び同じ推移を繰り返すのである。次に、この「ヴェール」をめぐる力関係の推移の性質をより明確にするため、第一部から四部までの人間関係の変化をプリシラを中心に考察しよう。

第一部では、プリシラは「婦人」として完全に「悪魔」ウエスタヴェルトの支配下にある。「悪魔」に対抗する立場の彼女の父ムーディ老人はあまりに無力であり、カヴァーデルは彼への協力を渋り、ホリングズワースとゼノビアは有力な協力者として暗示されるに止まる。即ち、プリシラに「ヴェール」を被せようとする「悪魔」の力が、取り除こうとするムーディ老人の力を完全に抑えた状態である。

第二部では「悪魔」は共同体の外側に残り残され、ムーディ老人とホリングズワースの協力によってプリシラは彼の支配から脱出し、共同体の中に保護される。従って、共同体と「悪魔」との対立関係が物語の背後に前提としてあるわけである。その上で共同体内部の人間関係が描かれるが、その微妙な変化に応じて第二部をA, B, Cの三段階に細分することができる。A段階はIV章からVIII章で、ムーディ老人（登場はしないが）とホリングズワースの協力関係がプリシラを「悪魔」から解放して共同体の中に保護することに成功し、直ちにゼノビアがその協力関係に加わる。従って、A段階では、「ヴェール」を取り除こうとする力がムーディ老人とホリングズワースとゼノビアによって形成され、第一部とは逆に被せようとする「悪魔」の力に対して優位を

占めるのである。

さてB段階はIX章からXII章までで、主としてプリシラがホリングズワースを狭んでゼノビアと拮抗している三角関係が暗示される。「ヴェール」を取り除こうとするA段階の三人の力の優位は持続するものの、その協力関係は、新たに発生した三角関係におけるゼノビアとプリシラの対立とXII章の「悪魔」とゼノビアの密談によって、不吉な影を投げかけられるのである。

XIII章からXVII章までがC段階であるが、冒頭の挿話の中でゼノビアは、前章の「悪魔」の誘いに応じてプリシラを渡す決意を表明する。それを受けて、XIV章でホリングズワースとゼノビアに取り残されたプリシラの姿が、次章ではその二人の結びつきを裏づけるようなホリングズワース自身の言葉とカヴァーデルの疑惑が描かれることなどから、この段階の人間関係は第三部冒頭のXVIII章に描かれるカヴァーデルの夢に象徴されると考えられる。この夢は、それを見た時点以前、即ちこのC段階の状況から彼が受けた印象を素材として生まれたものであろう。

この夢の内容は、カヴァーデルのベッドの中に狭んでゼノビアとホリングズワースが熱烈なキスをお互いに、部屋の窓の外からそれを覗き込んでいるプリシラの悲しそうな顔は次第に消えていく、というものである。Crewsの解釈によれば、ベッドを狭んでのキスは性的情熱を意味し、それを見たプリシラの悲しみは性的情熱への幻滅を意味する。ホリングズワースから離れたプリシラのイメージは、自分との恋愛関係に入って欲しいというカヴァーデルの意図を示すが、それが露骨になる前にこのイメージは消えなければならない。即ち、この夢は、彼にとってプリシラが恋愛感情の対象でありながら常に恋愛関係を拒否する純潔な妹のような存在であることを暗示すると同時に、彼の内に潜むエディプス・コンプレックスとその結果としての女性に対する近親相姦的固着を露呈するものである。<sup>(15)</sup>

この解釈には非常に説得力があるが、性的な意味に加えてこの夢は、B段階の三角関係の均衡が破れ、ホリングズワースとゼノビアの結びつきが決定的になったこと、それによってプリシラが疎外され裏切られたことをも暗示していると考えられる。しかも、既に見た如く、ゼノビアの背後に潜む「悪魔」の存在によって、彼女とホリングズワースとの結びつきは「悪魔」に加担する性質を持つことが明らかである。即ち、C段階では、いまだにプリシラが共同体の中に保護されているが故に、「ヴェール」を取り除こうとする力が被せようとする力に対して表面的には優位を保っている。しかし、実際は、ホリングズワースとゼノビアが結びついてムーディ老人とのB段階までの協力関係を破り、逆に「悪魔」と手を組んで「ヴェール」を被せようとする力に加わり、取り除こうとする老人の力と拮抗した状態が内奥に潜んでいるのである。

さて、第三部では、冒頭のXVIII章でプリシラが再び「悪魔」の支配下に置かれたことが暗示され、上に述べた夢が現実になると共に、第二部C段階の関係の均衡が破れて「悪魔」、ホリングズワース、ゼノビアの「ヴェール」を被せようとする力がムーディ老人の取り除こうとする力に対して優位を占めたことが明らかになる。続く第四部では、ついにホリングズワースがプリシラを狭んで「悪魔」と対決し、「ヴェール」を取り除き、彼女を救出する。更にXXV章で、彼はゼノビアとも対決し、彼女との結びつきを解消し、プリシラを得て最終的な勝利を納めるのである。即ち、ムーディ老人に背後から支えられた(と思われる)ホリングズワースの「ヴェール」を取り除く力が、被せようとする「悪魔」の力に

に勝ち、「悪魔」と結びついたゼノビアの力をも退けて完全に優位を占めるのである。

尚、カヴァデールは、第一部で既にムーディ老人への協力を渋ることによって「ヴェール」を取り除く力に加担する好機を逸しながらも、第二部A段階までは三人の仲間と親しかったが、それ以降は挿話にセオドルとして描かれる如く、「好奇心」に満ちて彼らの秘密を探りながらも自分が傷つくことを恐れる不慮な傍観者として、対立する二つの力の闘争を見守っているに過ぎない。

以上の考察から、この作品は、プリシラを狭んで彼女に「ヴェール」を被せようとする力（「悪魔」を中心とする力）と、逆にそれを取り除こうとする力（ムーディ老人を中心とする力）との対立闘争の歴史とも言えよう。本論の二章で考察したような様々な精神的特質の故に登場人物達は各自「ヴェール」の処置を決め、その処置に応じて人間関係が変化し、その変化に従って上記の二つの力は形を変えながら対立し、筋を展開させるのである。このような筋の展開を招くのは、既に本論の一章で述べた「ヴェール」の定義④の特質——プリシラを呪縛し、支配するための道具——であることは明白である。この特質の故に、「悪魔」は彼女にそれを被せようとし、彼女を障害として認識する者は彼に協力するのであり、逆に父親を始めとして彼女を救おうとする者は、それを取り除こうとするのであるから。従って、「ヴェール」は、定義④で示された「悪魔の支配の道具」という特性の故に、作品の筋を展開させる大きな推進力の一つとして機能しているのである。

#### 四

本章では、「ヴェール」の役割をその中身、即ちプリシラの役割と関連させて考察してみたい。前章で彼女をめぐる二つの力の対立闘争を考察したが、その力に属する者の内で究極的に彼女を支配する能力を持つ人間は、ウエスタヴェルトとホリングズワースである。前者は催眠術によって、後者は彼女が彼に抱く愛情に訴えることによって、各々彼女を支配する。Henry Jamesの指摘する如く、注目すべきことは、この二人に二分された彼女の服従心であろう。(16)

ホーソンによって描かれる他者支配の型は二種類ある。第一は、肉体あるいは可視的物体の支配である。ラパチニがベアトリスの肉体を医学の知識と技術によって改造し、不可侵の美と不死を与えようとした如く、またエルマがジョージアナの痣を消して彼女の美を完全にしようとした如く。第二は、精神の完全な支配である。その典型は、『緋文字』におけるチリングワースのディムズデールに対する復讐に見出される。プリシラに対するウエスタヴェルトの支配も、第二の型に属すと思われる。

プリシラに対する彼の絶大な支配力は、XXIII章の公開実験の場に描かれるが、この種の支配力が究極に於て到達するであろう極端な典型が噂話の中に語られる。それによると、そんな支配者の手にかかれば、人間の人格などはワックスの如きものと化し、美德も悪徳も彼が勝手に捏ねあげる型に過ぎず、個人の精神などは実質的には滅びてしまうという。これは、まさしくチリングワースによってディムズデールが導かれつつあった心理状態を想起させる。このような支配力の共通点は、対象への愛の欠如とその精神に対する機械的地上的な見方——無私の愛、自己犠牲、善への信頼、神への信仰心等といった天的要素の無視——である。ウエスタヴェルトもチリングワースもこのような立場から神の特権たる人間精神への支配権を奪おうとする「神への叛逆者」であればこそ、ホーソンは彼らを

「悪魔」と呼ぶのである。ウエスタヴェルトに対する服従心にも拘らず、プリシラが彼に対して嫌悪感や恐怖心を抱いていることは、彼女が共同体を脱出したことや、ゼノビアから「ヴェール」に喩えた布地を被せられた時に失神したこと等に明らかである。

一方、ホリングズワースは、彼女が彼に対して抱いている愛情に訴えることによって彼女を支配する。彼に対する彼女の無垢の信頼と無私の愛は、IX, XIV, XXIV章に描かれる通りである。彼女はカヴァデールが認める如く、ホリングズワースの描く理想の女性、即ち男性に無条件に共鳴し、ひたすら彼を信じる存在“the sympathizer; the unreserved, unquestioning believer” (p.511)なのである。彼女に対する彼の支配力の強さは、その命令に従って彼女があれほど嫌悪し恐れているウエスタヴェルトのもとへすら行ったこと、しかもウエスタヴェルトの絶対的な支配力の中にありながら彼の呼びかけに直ちに応えたこと等に明らかである。

だが、彼の支配力はウエスタヴェルトのそれとは対照的に、彼女への愛に裏打ちされ、その精神の天上的要素を認めると共に、彼自ら少くとも意識的には「博愛主義者」として神の意志に忠実に生きているが故に、ウエスタヴェルトの支配力とは本質的に異なっていると言えよう。一人の人間の精神を自分の目的のために支配することによって神の特権を奪おうとしたという意味で、彼もまた「神への叛逆者」となったが、その動機は逆に神の意志に忠実たらんとする情熱の過剰ゆえのエゴイズムであった。従って、表面的には彼もチリングワースやウエスタヴェルトと同様に他者支配の第二の型に属すわけであるが、その動機は全く逆であるがゆえに、彼らのように「悪魔」としてでなく、IX章においてカヴァデールの見解が暗示する如く、むしろ「神のパロディ」として描かれていると言うべきであろう。従ってこの作品の中では「悪魔」と「神のパロディ」がプリシラを獲得すべく対決することになる。

さて、プリシラがこの二人に対する自分自身の好悪の感情とは無関係に彼らに交互に支配される最大の原因は、彼女自身も認めている(“I never have any free will.” p. 540)「自由意志の欠如」であろう。この点に関連して、彼女とゼノビアを比較考察してみたい。ホーソーンは、人間を善悪の、あるいは天上的要素と地上的要素の二元的存在として認識する。<sup>(17)</sup> その典型として「ラパチニの娘」のベアトリスを例に挙げることができよう。彼女の美しいが有毒の肉体はラパチニに支配される地上的要素であり、精神は無私の純愛を達成することによって神の完全なる支配を受け入れる天上的要素である。プリシラとゼノビアの場合は、この人間の二元性が各々に集中的に付与され、前者が天上的要素を、後者が地上的要素を各々具現していると考えられる。

プリシラの天上的要素は、その青白い繊細な風貌、“ghost-child” (p.549)と呼ばれるような神秘的洞察力(一時的に「悪魔」に悪用されるが)、共同体の仲間から愛される純真な性質、彼らに対する彼女の無垢の愛情等に暗示される。とりわけホリングズワースに対する無私の愛には、ジョバンニへの愛ゆえに解毒剤を飲んで肉体を放棄するベアトリスと共通の精神的特質がみられる。それは、即ち「エゴイズムの欠如」であり、既に述べた「自由意志の欠如」につながる特質であると言えよう。

一方、ゼノビアの豊満で華やかな風貌、女権拡張論となって現われる強烈な自己主張、自尊心——ベアトリスが無私の愛ゆえに自己放棄としての死を選んだのと対照的に、ゼノビアは傷つけられた自尊心ゆえにホリングズワースに恨みの言葉を残してあてつけがましい自殺を遂げる——、共同体の実験に対す

る現実的で冷やかな見方、そしてプリシラに「ヴェール」を被せるに至った地上的価値（富と恋）への執着とエゴイズム等に彼女の地上的要素が暗示される。これらは、彼女がプリシラとは対照的に、強烈な「エゴイズム」とその根底にある「自由意志」によって生きていることを示すのである。

この二人の決定的な相違——天上的要素と地上的要素の根本的相違点としてホーソーンが設定したものは、まさにこの「自由意志」の有無であると言えよう。実際、この点は、ピューリタニズムの源泉たるプロテスタンティズムの祖、ルター思想において、非常に重要な位置を占めるのである。Erich Frommは、ルター思想の二面性について以下の如く述べる。<sup>(18)</sup>一つの面は、ルターが宗教問題で人間に与えた独立性であり、これは近代社会における政治的精神的な自由が発展する一つの源泉となった。もう一つの面は、彼が人間の根本的な「悪」（人間の性質は生まれながらに墮落していること）と「無力」（善を選ぶ自由が全く欠けているということ）を強調したことである。この人間の「悪」と「無力」を確信することが神の恩寵の成立する本質的条件であり、神は人間の見知らぬ正義と知恵によって人間を救済する。人間は「無力」であり、正義は彼の意志とは無関係に外部から訪れるのである、と。

ルターの「奴隷意志論」には、人間の無力について次の記述がある。「……このようにして人間の意志は、いわば神と悪魔との中間にいる獣のようなものである。もし神がその上に宿れば、神の意志のままに意志し、動くであろう……もし悪魔が乗り移れば、悪魔の意志のままになる。どちらの乗り手の方へ走るか、またどちらを求めるかは彼の意志の力にはなく、乗り手自身がそれを捕えようと争うのである。」「……人間は神に向かつては『自由意志』を持たない。彼は、神の意志に対しても、悪魔の意志に対しても、捕われの身、奴隷、奉仕する召使いである。」<sup>(19)</sup>

この記述は、「悪魔」ウエスタヴェルトと「神のパロディ」ホリングズワースに交互に支配されるプリシラの状況と驚くほど一致する。彼女の特徴である「自由意志の欠如」は、ピューリタニズムの源泉たるプロテスタンティズムの祖、ルターの根本的な人間観であり、彼によれば、それなくして神の恩寵も救済も望めないのである。従って、ピューリタンの子孫であり、本質的にピューリタンであったと考えられるホーソーンが「自由意志の欠如」を天上的要素の中心に設定したことは当然であろう。このようなルターの人間像であるプリシラは、神の恩寵を受けるにふさわしいピューリタンの理想的な一典型として位置づけられるのである。

このようなプリシラから「ヴェール」が完全に取り除かれた時、状況はいかに変化したであろうか。まず第一に、ホリングズワースがゼノビアを退けたことが原因の彼女の自殺を挙げねばならない。彼女に具現される地上的価値は、プリシラの天上的価値の前に敗れ去ったのである。

第二は、ホリングズワースの変貌である。XXV章でプリシラを恋愛の対象として選んだ彼は、そのエゴイズムをゼノビアから痛烈に批判された時点で——この小論の二章で考察した如く、この批判は当を得たものである——既に微妙な変貌を示す。彼がプリシラを呼ぶ声は、自信を失いかけている者の震え声であり、屈強なはずの彼が弱々しい彼女に依存しようとしていることに、カヴァデールは気づく。彼は、もはやそれ以前の自信に溢れた存在ではない。ゼノビアに批判されて自分のエゴイズムを認識し、自分の罪を自覚したが故に、良心の苛責が声に表われたのである。

この変貌を決定的にしたものは、その後続くゼノビアの自殺である。しかも、彼女の死体捜索の折、彼は知らずに死体の心臓のそばを突き刺してしまう。これは、彼が彼女を死に追いやったことを象徴する事件であった。彼は、罪人を更生させることを一生の目標とする「博愛主義者」であり、主観的には神に任える「高僧」(“high-priest” p. 480)であった。その彼がゼノビアを殺すという大罪を犯し、一挙にその地位から「殺人犯」に転落してしまったのである。すべてが終わって数年後にカヴァーデルと再会した時、彼は完全に変貌していた。ふさぎこんだ表情で、ひたすらプリシラにすがりつこうとしつつ、ただ一人の殺人者(彼自身)の更生にかかりきりだと話す。(XXVIII章)以前の彼を「神のパロディ」として特徴づけていた「自信」、「自尊心」、「エゴイズム」はすべて消え去り、「殺人者」という自己規定に表われる「罪悪感」と、ひたすらプリシラに依存せずにはいられぬほどの「無力感」が、それらに取って代わっている。ゼノビアの自殺によって、彼は初めて自己に内在する「悪」を認識し、「罪悪感」に悩み始めると共に、「自由意志」を喪失し、「無力感」を得ることによってピューリタニズムにおける救済の二つの本質的条件を満したが故に、救済に一步近づいたのである。これを彼の「幸運なる墮落」<sup>(20)</sup>と呼ぶことが可能であろう。その結果、第三の変化として「悪魔」ウエスタヴェルトは、プラシラばかりでなく、一時的に獲得していたゼノビアとホリングズワースをもその支配圏内から失うに至ったのである。

このようにプリシラは、「ヴェール」を取り除いた後の彼女の实体が確かに天上的要素であることを明示した。ゼノビアに具現される地上的要素を滅し、ホリングズワースの「幸運なる墮落」をもたらすきっかけを与え、変貌後の彼に変わらぬ愛と尊敬を捧げることによって救済に導く役割を果たし、「悪魔」の支配圏を消滅させたこと等がそれを立証している。即ち、「ヴェール」は、小論の二章で考察した登場人物に内在する「悪」がプリシラの具現する天上的要素を封じ込め、彼女を媒介としてピューリタンの神の支配が地上に拡大されるのを阻止するための「遮断物」であると言えよう。

## 五

さて、本論において、一章で作中の「ヴェール」の定義が第一義的にかに機能しているかを、二章では登場人物の反応から「ヴェール」が各人の精神的特質を問う「試金石」であることを、三章では「ヴェール」が筋を展開させる大きな「推進力」となっていることを、そして四章ではプリシラに具現される天上的要素を封じ込める「遮断物」であることを考察した。これらの視点から複眼的に捉えたその役割から、「ヴェール」は作品に神秘的色調を付加するための小道具などではなく、作品の構成や作者の訴えるモラル、あるいは彼の罪と救済の概念に非常に重要な関係を持っていると結論することができる。

また、四章で言及したホーソンの罪と救済の概念について、及びその概念と「ヴェール」との関係については大いに考察の余地が残されているので、稿を改めて論ずることにしたい。

註

- (1) Hyatt H. Waggoner, *Hawthorne: A Critical Study* (Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard U. P., 1955), pp.178-192.
- (2) Nathaniel Hawthorne, "The Blithedale Romance", in *The Complete Novels and Selected Tales of Nathaniel Hawthorne*, ed. Norman Holmes Pearson (New York: Random House, Inc., 1965), p.441.  
尚, 原文引用及び邦語訳出の引用は全てこの版により, 以下, 括弧を付し, 頁数のみを以て示す。
- (3) Waggoner, *op.cit.*, p.178.
- (4) *Ibid.*, pp.185-7.
- (5) *Ibid.*, pp.187-9.
- (6) *Ibid.*, pp.190-1.
- (7) Terence Martin, *Nathaniel Hawthorne* (New Haven, Conn.: College & University Press, 1965), p.151.
- (8) Frederick C. Crews, *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes* (New York: Oxford U. P., 1966), p.204.
- (9) *Ibid.*, p.205.
- (10) *Ibid.*, pp.203-5.
- (11) Martin, *op.cit.*, pp.150-1.
- (12) Hawthorne, "The Snow Image: A Childish Miracle" *op.cit.*, p.1167.
- (13) Hawthorne, "The Blithedale Romance," *op.cit.*, p.567.
- (14) Hugo Mcpherson, *Hawthorne as Myth-Maker: A Study in Imagination* (Canada: University of Toronto Press, 1971), p.156.
- (15) Crews, *Loc.cit.*
- (16) ヘンリー・ジェイムズ, 小山敏三郎訳著, 『ホーソン研究』(南雲堂, 1972年), p.139.

- (17) *Ibid.*, p.207.
- (18) エーリッヒ・フロム, 日高六郎訳, 『自由からの逃走』(東京創元社, 1974年), pp.82-3.
- (19) Martin Luther, "The Bondage of the Will," translated by Henry Cole, M.A., (Grand Rapids, Michigan: B. Erdmands Publishing Co., 1931), p.74. からエーリッヒ・フロム, 日高六郎訳, 『自由からの逃走』p.84. への引用
- (20) ジェイムズ, *op.cit.*, p.208.

### 参 考 文 献

- Crews, Frederick C. *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes*. New York: Oxford U. P., 1966.
- Kaul, A. N. "The Blithedale Romance" in *Hawthorne: A Collection of Critical Essays* edited by A. N. Kaul. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice Hall, Inc. 1966.
- Martin, Terence. *Nathaniel Hawthorne*. New Haven, Conn.: College & University Press, 1965.
- Mcpherson, Hugo. *Hawthorne as Myth-Maker: A Study in Imagination*. Canada: University of Toronto Press, 1971.
- Waggoner, Hyatt H. *Hawthorne: A Critical Study*. Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard U. P., 1955.
- エーリッヒ・フロム. 『自由からの逃走』. 日高六郎訳. 東京創元社, 1974.
- ヘンリー・ジェイムズ. 『ホーソーン研究』小山敏三郎訳著. 南雲堂, 1972.